

あゆみ通信

VOL. 183

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

親鸞のことば

「南無阿弥陀仏」とは双方
向のはたらき

「南無」の言は
帰命なり「教行信証」

親鸞が人々に伝えたことを一言に集約すると、「南無阿弥陀仏とはなにか」と言えます。念仏など信じない、南無阿弥陀仏なんて呪文と同じなどと疑う人々に対して、熱心に南無阿弥陀仏のいわれ、はたらきを説きました。

この言葉は「南無」について述べたものです。「南無」は尊敬とか敬意を表すインドの「ナマス」の音に漢字を充てたもの(音写語)です。「帰命」は「(阿弥陀仏を)敬い心から信じる」と言うことです。

さらに親鸞は「帰命」について「本願招喚の勅命」(阿弥陀さまの命令)、つまり阿弥陀さまが私たちに「帰命しなさい」と呼びかけている言います。この呼びかけに育てられて、阿弥陀さまに背く私たちが帰命するようになるというのです。

このように「南無阿弥陀仏」は阿弥陀さまからの「帰命せよ」と、私たちのからの「帰命する」の双方向の意味を持っているのです。(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

親鸞聖人からの贈り物「正信偈」

「正信偈」は、日ごろ多くの人びとがお勤めに用いておられるお聖教です。



「正信偈」は、親鸞聖人が、ご自分のところにまで伝え届けられた念仏の教えの伝統を、深い感銘をもって受け止められ、そして、その感銘を味わい深い詩(偈文)によって、後の世の私たちに伝え示してくださったものなのです。

(中略)

「正信偈」は、まさに、私たちに届けられている「いのち」の歌とも言うべきものなのです。また、親鸞聖人が、間違いのない念仏の教えに出遇われた歓びのお気持ちを率直に表明された「歓び」の歌であると思います。

勤行の時に、この偈文を人々と共に声を調べて称えるのは、この歌に表されている感動を味わいつつ、聖人が示された念仏の伝統の意味を一人ひとり感謝をもって噛み締め、その教えの大切さを互いに確かめ合うことになるのです。私たちが何を依り処に、何に飲んで生きていくのか、それを日々確かめることになるのです。(後略)

(古田和弘「正信偈の教え」東本願寺出版より)

第2組聞法会

日時 7月16日(火) 14:00
会場 唯専寺(浪速区敷津西)
内容 「初めての正信念仏偈」
講師 宮部 渡先生

(15組 西稱寺)
テキスト「初めての正信念仏偈」をご持参ください。
お持ちでない方は、受付でお渡しします。

参加費 500円

日時 8月5日(月) 14:00
会場 光照寺(天王寺区上汐)
内容 「初めての正信念仏偈」
講師 宮部 渡先生

(15組 西稱寺)
テキスト「初めての正信念仏偈」をご持参ください。
お持ちでない方は、受付でお渡しします。

参加費 500円

聞法会5月開催



2024年5月13日(月) 午後2時から天王寺区の宗恩寺(池田英二郎住職)を会場に、今年2回目の第2組聞法会が、組内の住職や坊守、寺族と、門徒、推進員等28名が参加して開催されました。

墨林浩組長(光照寺住職)の進行で、真宗宗歌斉唱をして開会。池田住職の調声によりお勤めをして、前月に引き続き講師の大橋恵真先生による「初めての正信念仏偈」の「法蔵菩薩因位時～一切群生蒙光照」までを、語句の

自分のモノサシ

久しぶりにモノサシの話を。いろいろな他人や事象に出会うたびに、人生80数年の積み重ねによる自分の立派(?)な、独りよがりのモノサシが勝手にはたらく。「ああ、これだな」いつも、前住に教えてもらっているのに。出会うごとに気が付けば無意識のうちに、ヒトやモノを量っている自分がいる。いつも寺報をいただく、朋友とも言える住職から送られてきたチラシにこう書かれていた。

「自分のモノサシで問うのではなく、自分のモノサシを問うのが仏さまの教えです」あらためてかみしめている。合掌。(本)

意味を中心に12光について詳しくお話いただきました。

そして、阿弥陀仏の光は私たちの12種類の煩惱をよく照らし出して(教え、気付かせ)そこから解放させようとはたらいてくださっていると、親鸞聖人は受け取られたのではないのでしょうかと締めくくられました。

最後に、全員で恩徳讃を唱和して終了しました。

今回は、講師が宮部渡先生(15組西稱寺住職)で、7月16日(火)、午後2時から浪速区の唯専寺で開催されます。誘い合わせて、ご参加ください。

如是我聞

大橋先生の法語聞書
佛足寺 細川克彦



本日は『正信偈』の「法蔵菩薩因位群生蒙光照宗聖典第2版226P~227P)をお話し

くださいました。

最初の法蔵菩薩のところがなかなか難しいと言われ、「ところで皆さんは何故ここに来られたのですか」と尋ねられました。

人間は知性や理性ばかりでは分からない、意識の届かないところで「人間に生まれてきてよかった!」とか「私は私に生まれてきてよかった!」と思いたいと言う願いが心の深い所にあるのではないか。それは私たちを聞法の場へと歩ませる原動力、はたらきで、「法蔵菩薩のご苦勞」とか「信心の主体」と呼ばれてきたものではないかと。また、「五劫思惟」と



言うところでも、「人間は本当はどうなりたいのか?」と五劫の間考え抜かれて、48願を作られたと。なかでも18願は手を合わせて頭が下がることが一番の、本当の願ではないかと話されました。

(参考) 第18願 念仏往生の願
「設ひ我れ仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂よて我が国に生まれんと欲うて乃至十念せん、若し生れずば正覚をとり、唯だ、五逆と正法を誹謗するものを除く」

休憩後、「世自在王仏」について、法蔵比丘に世間には人間を本当に満足させるようなものは無いと、国と王位を捨てて出家されたように、そして親鸞聖人にとって法然上人のように、善知識の存在はとても大事であると。

その後、「12光」のお話では、光とは教えのことであるが、それは私たちが仏道に背いて、煩惱の只中で迷っていることを知らせるはたらきをしてくださる仏さまであると。

「無量光」とは私たちが量ってばかりしていることを知らせ、「無辺光」は自分で自分を縛っていることを、また「無碍光」はどんな鏡をも貫いて、碍りは私たちの煩惱にあることを知らせ、「無対光」は、いつも対立している心は慢心から出ており、「光炎王光」燃え盛る煩惱の薪を燃やし尽くすはたらきであるなど、

「12光」のはたらきについて述べられました。

結論として、求道しようと言う心の大切さと、善知識や仲間の存在の力を強調されて、その2点が法蔵菩薩の内容であり、無明の闇が晴れないと解決はない、明るい私はやってこないと話されました。

門徒会と合同研修会(予告)

日時 9月17日(火) 13:30
会場 宗恩寺(天王寺区四天王寺)
講題 「相伝」に学ぶ(仮)
講師 池田英二郎先生

(第2組副組長、宗恩寺住職)
参加費 無料

(解説) 真宗の「相伝」とは、宗祖親鸞聖人の教えを、歴代の門跡が伝授することです。そのために宗祖の著作『教行信証』の伝授が根幹であり、その教学が儀式と一体となって継承されていきました。

ただし、東本願寺教団には、歴代門跡の相伝を補佐する役割を担った五カ寺の寺院が設置されていました。

(以上は、「しんらん交流館」から抜粋しました。)

「相伝」は、耳慣れない言葉です。今まで、語られてこなかった理由は何なのか。また、親鸞教学との関係はどうなのかについて詳しくは、講師の池田英二郎住職から、お話いただくことになると思います。ぜひ、楽しみにご参加ください。

能登半島地震被災者支援救援ご寄付のお願い

今年の元旦に起こった地震災害は、復旧が進まず、6月になっても避難所生活をされている方が。東本願寺では災害被災者救援のご寄付を募っています。ご協力いただける方は、お手次のご住職にお届けください。南無阿弥陀仏。